

漢字圏出身の子どもの漢字指導について

日本語を初めて学ぶ外国人の子どもにとって、漢字の学習は困難な壁の一つで、多くの時間を費やすことになります。

◆日本生まれ育った日本語モノリンガルの子どもの場合、子どもたちが漢字を学習する場合、子どもたちがすでに理解していることばに漢字を結びつけていきます。漢字学習は主に、「字義（漢字の意味）」「字音（漢字の読み）」「字形（漢字の書き）」の3つのポイントで捉えられますが、低学年の学習では特に「字形」の指導に重点が当てられます。

	字義→	字音→	字形→	漢字語彙の量を増やす
国語科での漢字学習	既知のことばに、漢字と読み方を結びつけて理解していく。低学年の場合、日常生活の中ですでに知っている漢字もある。学年が進むと、部首や形声文字の学習なども行う。		書き順の指導、字形の指導（とめ、はね、はらい…）、反復練習が一般的な指導の流れ。漢字ドリルの構成も同様の傾向にある。	すべての教科の教科書の表記が、学習指導要領の学年別漢字配当表に準じているので、指導者が特別に意識をしなくても、その学年の学習全体を通じて、漢字を使った語彙の習得が可能。

◆非漢字圏の子どもの場合、まず「ことばの意味」が分かる必要があります。『かんじだいすき』（（社）国際日本語普及協会）や『絵でわかるかんたんかんじ』（スリーエーネットワーク）『Meu Amigo Kanjis』（東京外国語大学）等の、外国人の子どもを対象とした漢字教材では、「漢字の意味」を「絵」（『Meu Amigo Kanjis』は翻訳も）を使って理解させながら、漢字の読み書き指導を行う構成です。従来の国語科の漢字指導の前段階に「絵」によることばの意味理解を挿入する指導は、日本語を初めて教える指導者にとって、馴染みやすい指導方法です。

また、学習指導要領の学年別漢字配当表に準じる指導では、漢字の構成要素となる基本漢字（例えば、ロ、糸、カ…）を低学年で学習します。こうした指導は、漢字学習が初めてという非漢字圏出身の子どもにも無理がありません。

外国人の子どもは移動が多く、日本国内でも地域によって日本語指導の状況が異なり、指導の継続性が担保されていません。「前の学校で○年生の漢字を学習していた」ということが、前籍校での指導の段階を把握するもっとも単純なスケールともなり、公立学校で学ぶ外国人の子どもの多くは、学年別漢字配当表に準じるテキストで学習していることが多いようです。

	ことばの意味理解→	字義→	字音→	字形→	漢字語彙の量を増やす
非漢字圏出身の子どもへの漢字指導	「ことばの意味が分からない」レベルから学習を始めるので絵や翻訳で、ことばの意味を理解する。	覚えたばかりのことばや、普段使わないことばも漢字で覚える必要があり、時間がかかる場合もある。	音訓を同時に覚えるのは難しく、子ども用漢字教材では、読み方を音訓のいずれかに限定している。主に日常会話で使われる「訓読み」を中心に学ぶ形式が多い。	書き順の指導、字形の指導、反復練習が、一般的な指導の流れ。母国の文字の書き方の影響で、筆順などは習得に時間がかかる場合もある。指導者が細部にこだわりすぎると子どもの意欲をそぐことにもなる。初期段階では、活字（フォント）の種類が変わると対応できないこともある。	外国人の子ども用の漢字教材を終えても、学年相当の漢字語彙の量は圧倒的に少ない。読み替え漢字の練習などを足していく必要がある。
	フラッシュカードの読みやカルタなど、負担が少なく楽しくできる反復練習をすることが多い。文脈の中で、ことばの意味理解をしていく必要があり、漢字を使った文の読みは不可欠。			日本語指導の時間だけでは、漢字の書きを習得することは難しい。在籍学級の担任と連携し、毎日の宿題にするなどの支援が必要。	在籍学級で学習する全教科の教科書のルビ付けなど、学年相応の学習に追い付くにはプラスαの支援が必要となる。

◆漢字圏の子どもへの指導の場合、先ず、日本語と中国語の漢字の比較をし、「同形同義」や「類形同義」の漢字については、「字義」や「字形」の指導は確認程度で終了できます。「字音（読み）」の指導を集中的に行うことで、短期間に多くの漢字語彙を覚えることができます。日本人の指導者は、中国語の知識がないことが多く、中国語との比較ができません。そのため前述したような非漢字圏の子どもへの指導と同じ方法で指導を行うこともあり、漢字圏出身の子どもの中には馬鹿にされたように感じることもあるようです。

漢字圏の子どもへの指導で注意する点は、

①形の違いに注目させる。

例えば、「鳥」を「𪇔」と書くなど、学習が進んでも中国語の書き方で書いていることがあります。

②熟語の読みを徹底する。

特に「同形同義」や「類形同義」の漢字については、中国語として覚えるほうが容易く、日本語の読みを覚えなないこともあります。そのため意味は分かっているけれど正しく読めない（発音できない）ということがあります。

③送り仮名による意味や読み方の違いに注意させる。

例えば、「参加・不参加」ならば理解できますが、「参加する・参加しない」だと意味が分からないという場合があります。あるいは、「集まる・集い」のように送り仮名によって漢字の読み方が変わる場合も注意が必要となります。こうしたことを理解し、運用できるようにするには、漢字の入った文章を沢山読むことが必要となります。

④学年別漢字配当表に準じるテキストで、下学年の漢字から学習を始める場合でも、学年相応の漢字の指導を並行して行うことが可能です。例えば、2年生で学ぶ「心ぞう」と6年生で学ぶ「心臓」の場合、漢字圏出身の子どもには「心臓」の方が覚えやすいわけです。この点が、漢字を初めて学習する非漢字圏出身の子どもの指導と大きく異なります。教科の学習には、その学年で学習する漢字語彙が学習用語として頻出します。在籍学級での学習では、漢字で書かれたことばは理解できるけれど、聞いたり話したりする場面で分からない等、困ることがあり、学年相応の漢字学習を早い段階で始める必要があります。中学生の場合、（学年別漢字配当表に準じるものではない）成人用の漢字テキストで音訓読みの両方を同時に学習することも可能です。

この教材（漢字の練習帳）では、公益社団法人国際日本語普及協会（AJALT）のご厚意により、『かんじだいすき（一）』の構成（課ごとの提出漢字）や読み書きのモデル文のご提供をいただきました。深く感謝申し上げます。

この教材では、特に漢字圏出身の子どもが学習しやすいように、中国語訳を付けました。また、読み替え漢字についても、情報を入れこみました。『かんじだいすき（一）』と併せてご活用いただけたと思います。

作成： J Y L プロジェクト
漢字圏教材作成チーム
作成年：2011 年 11 月